

# 左京二条三坊・東二坊大路 の調査

## —第168-8次

### 1 はじめに

橿原市教育委員会からの委託事業として、農業用水路改修工事にともなう発掘調査を実施した。対象地は橿原市法花寺町で藤原京左京二条三坊にあたる。

調査区は長さ132m、幅約2mで設定し、東側に50cm分の拡張区と、西側に50cm分の拡張区をそれぞれ2カ所ずつ設けた。全体の調査面積は、拡張区等を含めて約295㎡である。調査区中ほどを横切る道路より北側を北区、南側を南区と呼称する。北区北端のJR線近接部分は専門保安員立会の下、12月5日より7日までの3日間調査を行った。全体の発掘調査期間は、2011年12月5日から2012年1月26日までである。

### 2 検出遺構

調査区の基本層序は、上から①表土、②耕作土・床土、③水路堆積土、④古代の整地土（黄褐色系粘質土）、⑤地山（青灰色粘質土、黄灰色細砂、灰色砂礫層）の順である。古代の遺構は、地山の上に一定量の整地を施したのちに掘り込まれている。

調査区の大部分が現代の水路与重複し、ほぼ全域で遺構面が失われていたため、遺構検出は壁面での確認が中心となった。ただし、北区南半および南区では、平面で整地土を確認した。

検出遺構は以下の通り。

SD11020 北区北端部で検出した幅1.7～1.9mの東西溝。東西壁面および調査区西側において一部平面で検出した。残存する深さは30～50cmである。埋土からは古代以前の土師器・須恵器片が数点出土した。

SD11021 北区北半部で検出した幅1.4m程度の東西溝。西壁は水路で削平されていたため、東壁面および東側平面で検出した。古代の整地土を掘り込む。埋土は灰色砂質土である。

SK11022 南区南端部において、東の壁面および平面で検出した幅約3.1mの土坑。深さは約15～25cm。後述のSK11023に先行する。遺構の底面に接するように、古墳時代前～中期の土師器片10数点がまとまって出土した



図141 第168-8次調査区位置図 1:3000

が、互いに接合しなかった。

SK11023 SK11022のすぐ南方に位置する。東の壁面および平面で検出した、幅約1.1mの土坑である。深さは約50cm。層序から、古墳時代～古代の遺構とみられる。土師器片が少量出土した。

SD11024 北区南半部において、東の壁面および調査区東側で一部平面検出した、幅約2.8mの東西溝である。残存する深さは15～25cm。出土遺物はないが、整地土から地山まで掘り込んでおり、古代の溝と考えられる。

(庄田慎夫・木村理恵)

### 3 出土遺物

調査区からは、土器、瓦類、石器、土製品、獣骨等が出土した。

土器(図143) 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器が出土した。多くは近世以降のものであり、古代以前の土器は少ない。

図示した土器は4点で、1がSK11022、4が古代の整地土から出土しているほかは、水路堆積土からの出土である。1は土師器甕であり、口縁端部外面を肥厚し丸くおさめる。古墳時代前期から中期のものと考えられる。2の土師器甕は、頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部外面に狭い面を持つ。肩部は丸みを持ち、内外面ともに

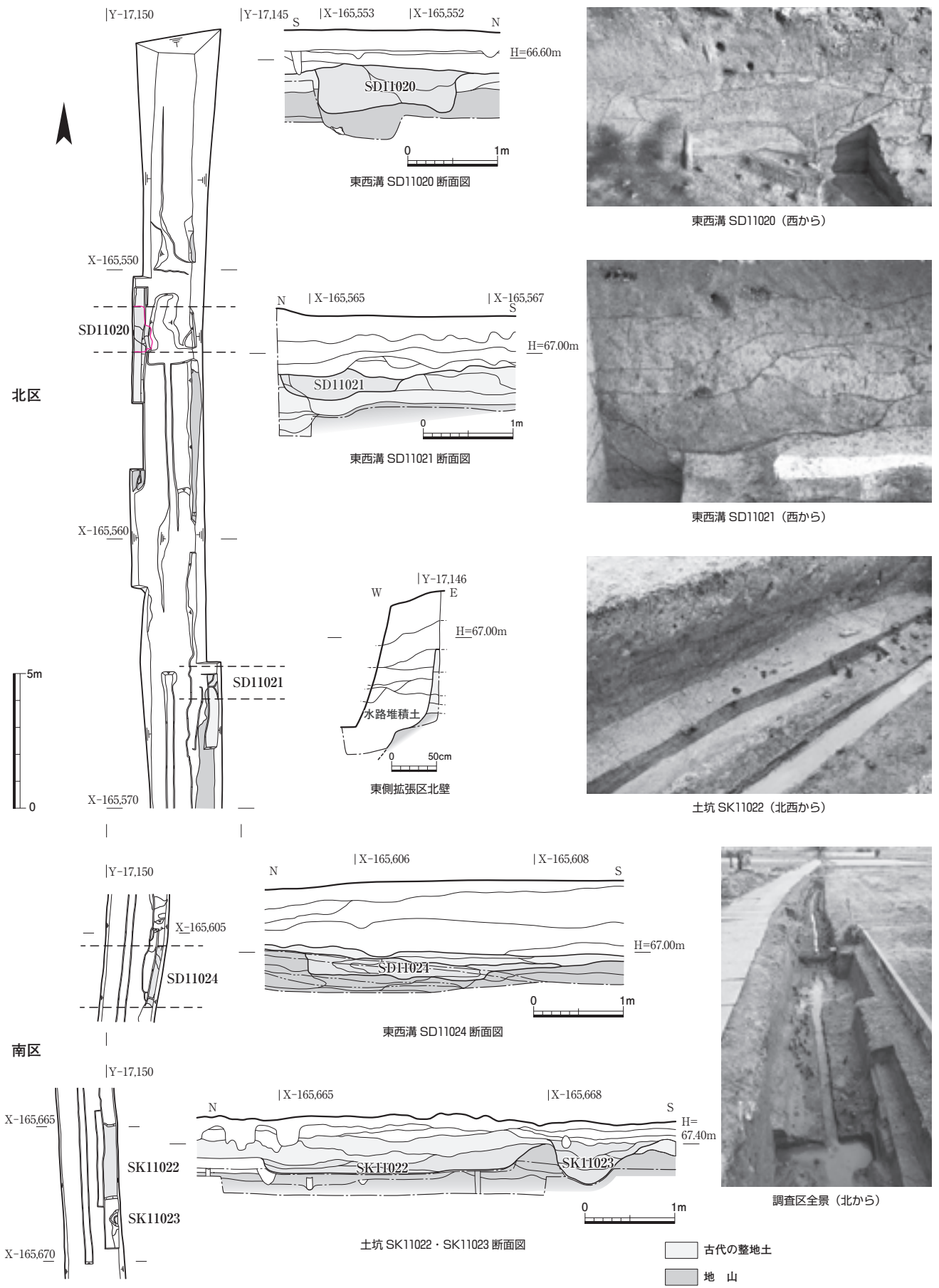


図142 第168-8次調査遺構図 (1:200)・断面図 (1:60) と遺構写真

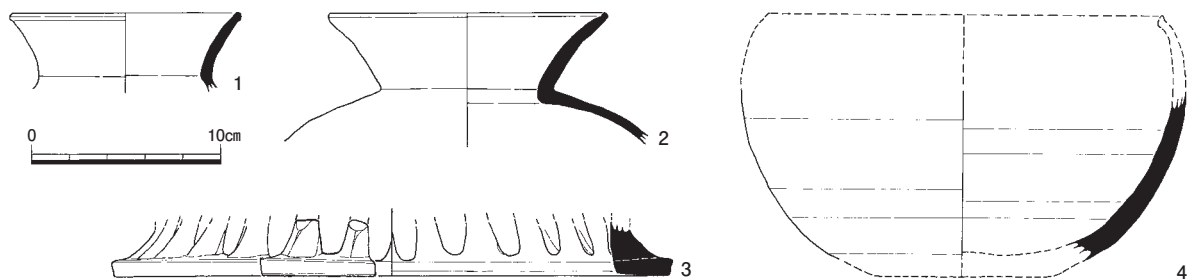


図143 第168-8次調査出土土器 1:4

ナデ調整を施す。古墳時代中期の所産である。3は須恵器蹄脚円面硯である。薄板状の脚台に三角形の脚柱を貼り付けている。藤原宮期から奈良時代前半のものと考えられる。4は須恵器鉢Aであり、底部にロクロケズリ調整を施す。内外面に鉄釉を塗布した痕跡が認められることから、尾張産の可能性が高い。7世紀後半から8世紀前半のものと考えられる。

(高橋 透)

**瓦類** 第168-8次調査では、古代瓦としては軒平瓦1点、丸瓦90点(9,530g)、平瓦25点(2,660g)、熨斗瓦1点、籠描き瓦1点が、近世瓦としては軒丸瓦3点、軒平瓦4点、丸瓦103点(8,220g)、平瓦347点(33,110g)、熨斗瓦2点が出土している。古代の軒平瓦は、左偏向の変形忍冬唐草文の6647C型式の小型破片資料である。同型式には、藤原宮東北面門所用の6647Ca型式、本薬師寺所用の6647Cb・Cc型式があるが、平瓦と顎の接合部に重弧文風の刻み目が観察されることから、6647Ca型式と判断した。

(渡辺丈彦)

**石器**(図144) 打製石鏃が1点出土した。残存長5.1cm、厚さ0.6cmを測り、重量は4.1g。左右表裏ともに非対称で、先端部は破損している。

**土製品**(図144) 円盤形土製品が1点出土した。直径4.2cm、厚さ1.5cmを測り、重量は41.0g。扁平であることや厚さなどから、土器底部を転用したものと考えられる。平面および側面に、部分的に敲打痕が見られる。

(庄田)

**動物遺存体** 水路堆積土から、ウシの橈骨の骨幹部が1点出土した。

(山崎 健)

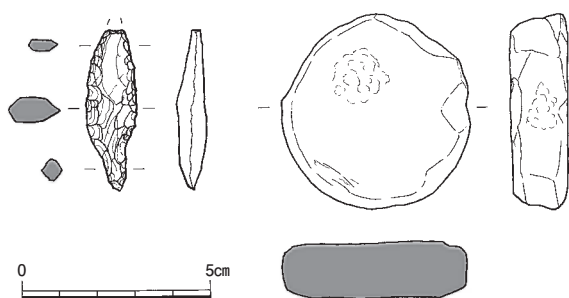


図144 石器と土製品 1:2

## 4 まとめ

本調査では、東西溝3条、土坑2基の遺構を検出した。

SD11020は、埋土から古代以前の土器片が出土したため、古代以前の東西溝と考えられる。SD11021は推定二条条間路北側溝から南に約1m溝心がずれるものの、二条条間路北側溝の既調査(第54-23・60-5・60-19次)と比較すると、規模や溝底標高は齟齬をきたさないことから、北側溝の可能性も考えられる。なお、推定二条条間路南側溝にあたる位置は、攪乱により遺構を検出することができなかった。

SK11022は、出土土器から古墳時代の土坑と考えられる。これに隣接するSK11023は、層位的にSK11022より後代のものである。これらの遺構の掘方の上面は標高67.40m前後に位置するが、これは上述のSD11021の検出レベルよりも1m程度高い。この標高でこれら古墳時代の遺構が残存していることから、この部分は条坊側溝の設置に伴う掘削を受けていなかった可能性が高い。図示した東二坊大路の推定位置が正しいとすれば、これら古墳時代の遺構が路面の下であったため、壊されずに残されていた可能性も考えられるであろう。

また、SD11024からは遺物は出土しなかったが、SD11020が掘り込んでいる整地土と同一層から掘り込んでいることより、古代の溝と考えられる。

本調査地は藤原京東二坊大路推定位置に相当するものの、現代の水路による攪乱や狭長な調査区という制約があったため、道路状遺構は確認されなかった。しかしながら、二条条間路北側溝の可能性のある東西溝など、藤原宮期を含む古代以前の遺構をいくつか確認することができた。また、水路より、古代のみならず縄文土器から近世陶磁器まで多岐にわたる遺物が出土しており、周辺の土地利用史を復元する手がかりを得られたといえる。

(庄田・木村)